

教科に関する調査の結果概要

【小学校】

- ・国語、算数ともに大阪府平均を上回った。算数は全国平均を上回り、国語は全国平均をやや下回った。
- ・無解答率が低く、粘り強く問題に取り組んでいることが分かる。

【中学校】

- ・数学は、府平均と同程度で全国平均を下回った。国語は全国及び府平均を下回り課題である。英語については、全国及び府平均と同程度であった。

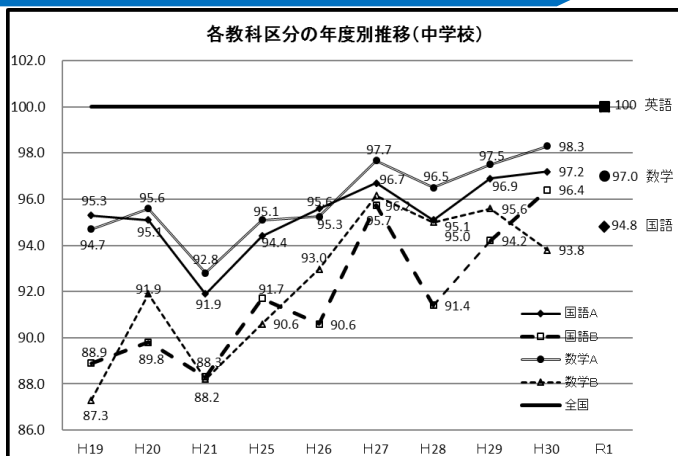
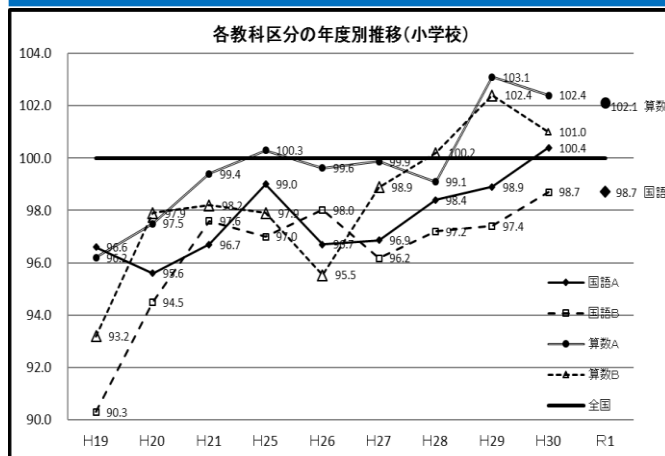
「堺版授業スタンダード」を中心とした各校における授業改善は進んでいる。今後、習得・活用の学習過程に加えて、探究的な学びの充実に取り組み、子どもが主体的考える授業改善のより一層の充実を図り、学力向上に努める。

平均正答率の経年比較(全国と堺市)

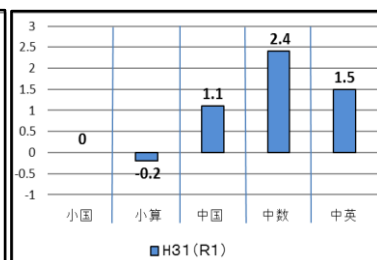
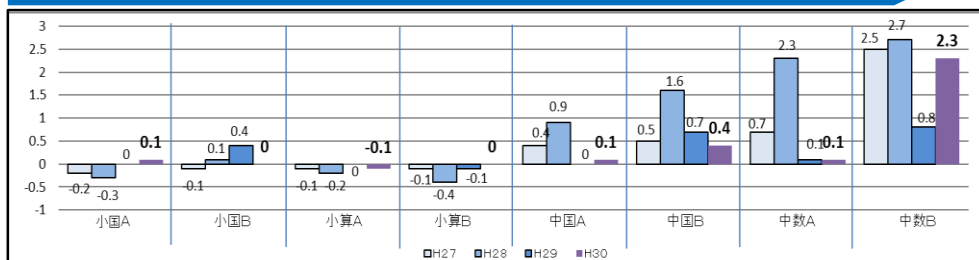
※H31(R1)は、国語、算数・数学がAB一体化されています。

		H28				H29				H30				H31(R1)				
		堺市	大阪府	全国	全国差	堺市	大阪府	全国	全国差	堺市	大阪府	全国	全国差	堺市	大阪府	全国	全国差	
小学校	国語	A区分	71.7	71.3	72.9	-1.2	74	72	74.8	-0.8	71	68	70.7	0.3	63	60	63.8	-0.8
		B区分	56.2	55.4	57.8	-1.6	56	54	57.5	-1.5	54	52	54.7	-0.7	63	60	63.8	-0.8
	算数	A区分	76.9	76.9	77.6	-0.7	81	78	78.6	2.4	65	63	63.5	1.5	68	66	66.6	1.4
		B区分	47.3	45.8	47.2	0.1	47	45	45.9	1.1	52	51	51.5	0.5	68	66	66.6	1.4
中学校	国語	A区分	71.9	73.5	75.6	-3.7	75	75	77.4	-2.4	74	75	76.1	-2.1	69	70	72.8	-3.8
		B区分	60.8	63.3	66.5	-5.7	68	69	72.2	-4.2	59	59	61.2	-2.2	69	70	72.8	-3.8
	数学	A区分	60.0	61.7	62.2	-2.2	63	64	64.6	-1.6	65	65	66.1	-1.1	58	58	59.8	-1.8
		B区分	41.9	43.1	44.1	-2.2	46	46	48.1	-2.1	44	46	46.9	-2.9	58	58	59.8	-1.8
英語	聞く読む書く													56	56	56.0	0.0	

全国平均正答率を100とした場合の堺市平均正答率 経年比較(H19-H31(R1))

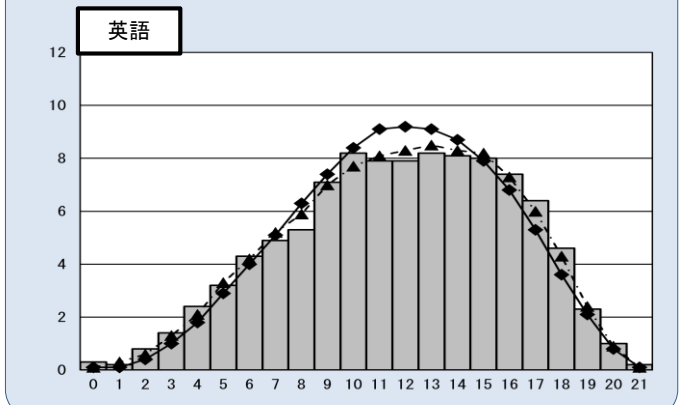
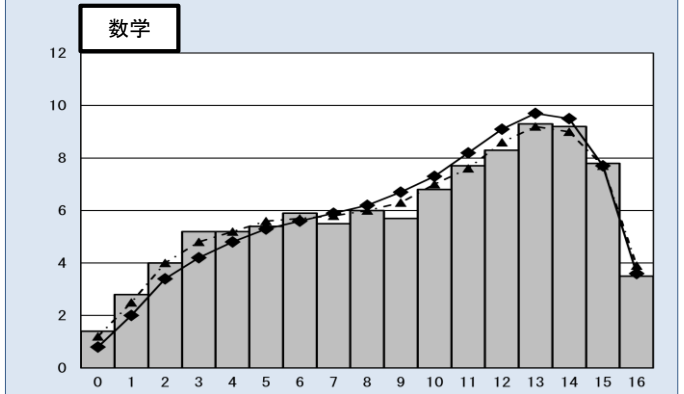
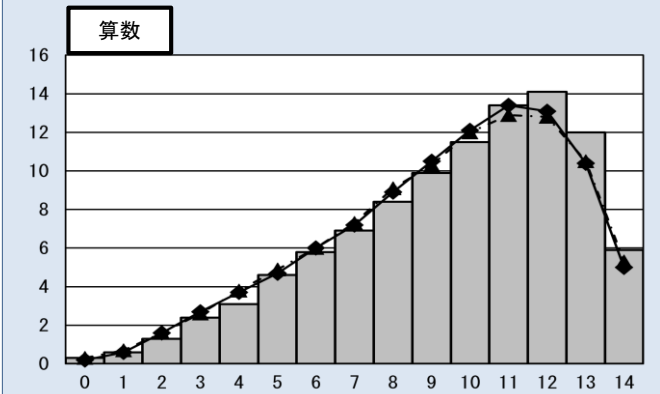
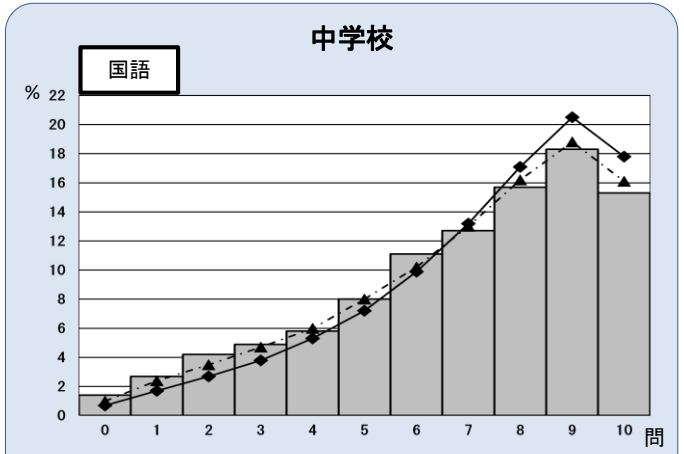
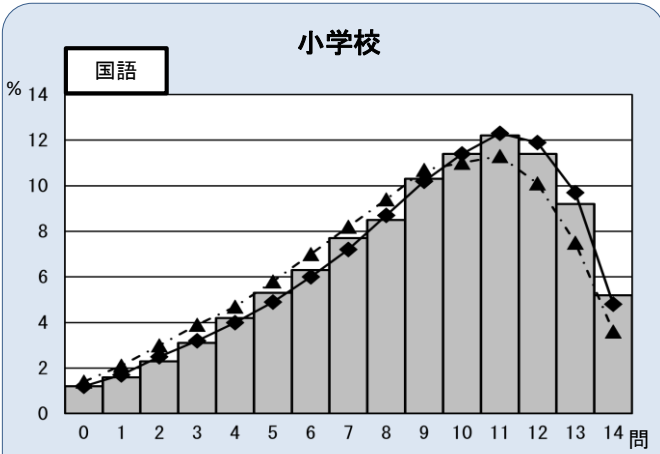


無解答率における全国と堺市の差 経年比較

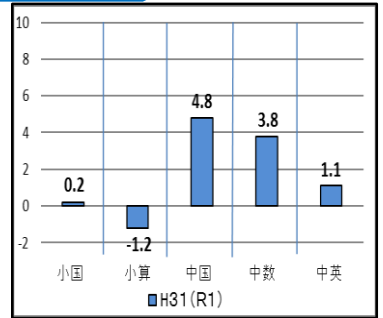
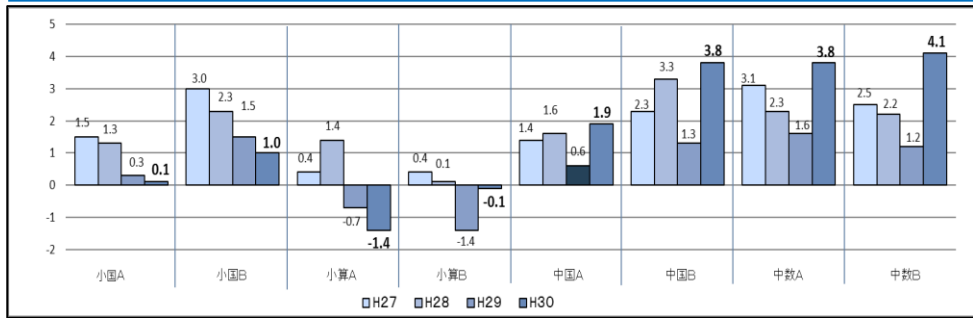


各教科正答数分布 (全国と堺市)

堺市 全国 大阪府



下位層 (正答率40%未満) 児童生徒割合の全国・堺市比較

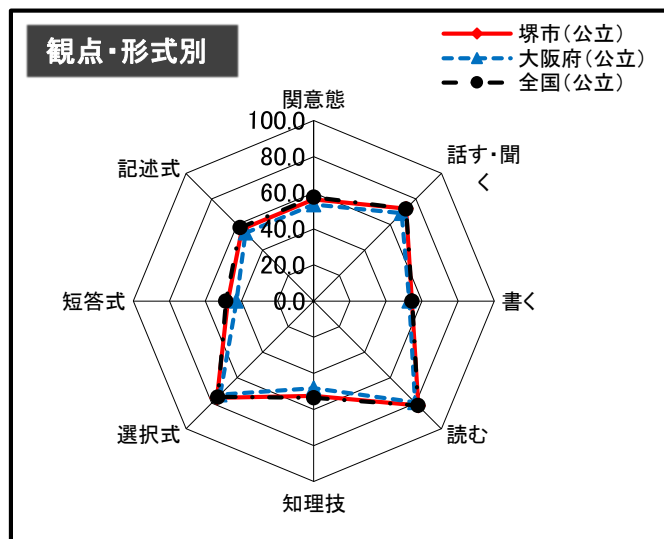
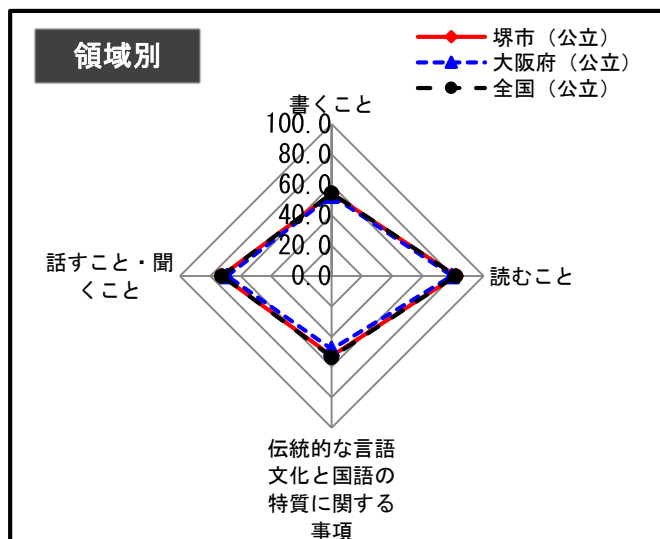


小学校国語

- 平均正答率は、63%である。「話すこと・聞くこと」の領域では、平均正答率が70%を超え「読むこと」の領域では80%を超えており、成果が見られる。また、全国平均と同程度である。
- 「書くこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の領域では、平均正答率は50%程度であり、全国平均をやや下回った。基礎的・基本的な知識の定着と書く力を育成する必要がある。
- 選択式問題の正答率が高いものの、短答式や記述式の正答率が低く、全国平均よりも下回っている。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市 (公立)	大阪府 (公立)	全国 (公立)
全体		14	63	60	63.8
学習指導要領 の領域等	話すこと・聞くこと	3	72.4	68.8	72.3
	書くこと	3	54.3	52.9	54.5
	読むこと	3	81.9	79.3	81.7
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	5	52.6	48.2	53.5
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	3	56.3	53.4	57.6
	話す・聞く能力	3	72.4	68.8	72.3
	書く能力	3	54.3	52.9	54.5
	読む能力	3	81.9	79.3	81.7
	言語についての知識・理解・技能	5	52.6	48.2	53.5
問題形式	選択式	7	75.7	73.3	75.1
	短答式	4	47.5	42.8	48.7
	記述式	3	56.3	53.4	57.6



今後の取組

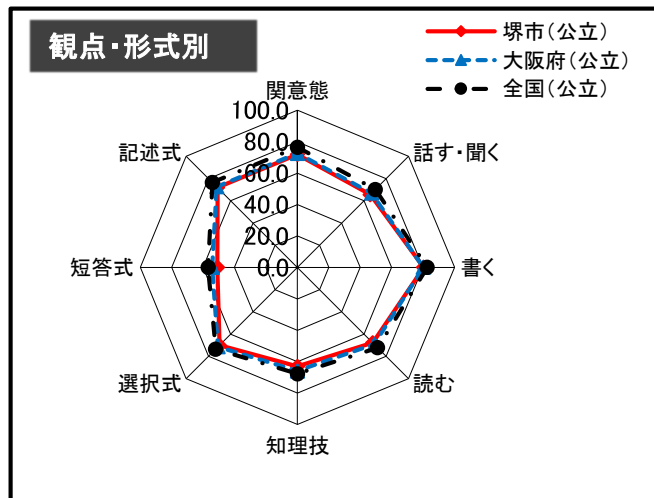
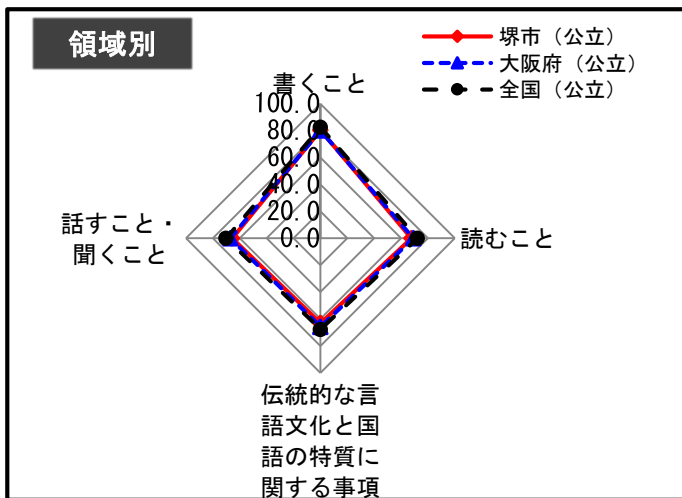
- より説得力をもって自分の考えを伝えるために、目的や意図に応じて、自分の考えを明確にし、まとめて書く学習の充実を図る。
- 「書くこと」に関する学習では、目的や意図に応じて複数の情報から必要な情報を取り出して四角や丸で囲んだり、自分の考えの理由となる語句と語句を線でつないだりして関係付けをしながら整理し、文章を組み立てる学習を充実させることが重要である。
- 高学年は、漢字による熟語などの語句の使用が増加するので、漢字辞典を使って意味を調べたり、同音異義語を使い分けた短文作りをしたりする学習などを取り入れ、正しく使うことができるようにする。また、文章を書くときは、積極的に漢字を活用するよう進める。

中学校国語

- 平均正答率は69%である。「書くこと」の領域では、平均正答率は80%を超えた。
- 国語全体の平均正答率は全国と比べ3.8P下回っている。全領域において、全国の平均正答率を下回っている。特に、「読むこと」「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」では全国平均と4Pの差が見られる。
- 「国語への関心・意欲・態度」は70%を超えているものの、全国と比べ、4.6P下回っている。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
	全体	10	69	70	72.8
学習指導要領 の領域等	話すこと・聞くこと	3	65.6	66.9	70.2
	書くこと	2	80.4	80.2	82.6
	読むこと	3	67.8	69.2	72.2
	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	2	63.0	65.8	67.7
評価の観点	国語への関心・意欲・態度	3	71.9	72.6	76.5
	話す・聞く能力	3	65.6	66.9	70.2
	書く能力	2	80.4	80.2	82.6
	読む能力	3	67.8	69.2	72.2
	言語についての知識・理解・技能	2	63.0	65.8	67.7
問題形式	選択式	6	70.1	71.4	73.6
	短答式	1	50.9	54.2	56.8
	記述式	3	71.9	72.6	76.5



今後の取組

- 国語の授業において育成をめざす資質・能力を明確にし、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域において言語活動を通して資質・能力を育成する。
- 「話すこと・聞くこと」に関する学習では、話合いの話題や方向を捉えて、自分の考えをまとめる場面を設定する。
- 「書くこと」に関する学習では、伝えたい事柄について、自分の考えを根拠を明確にして書く場面を設定する。その際、自分の思いや考えを繰り返すだけでなく、根拠を示す必要性を理解して書くことが重要である。
- 「読むこと」に関する学習では、文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉える場面を設定する。その際、目的や必要に応じて情報を過不足なく選択し整理することが重要である。

小学校算数

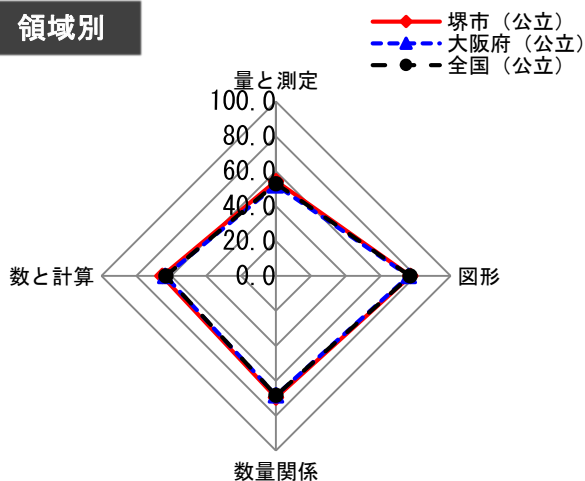
○平均正答率は68%であり、全国平均を上回っている。全領域で、全国平均を上回っていることから、問題解決的な学習の中で、言葉、数、式、図、表などを用いて筋道立てて考えたり、出てきた考えを既習の知識及び技能と関連付けたりする指導を行った成果が表れている。

●観点・形式別では、知識・理解を問う問題が全国と同程度であり、問題形式別では、すべて全国を上回っているものの、記述式については、正答率が低く、課題である。

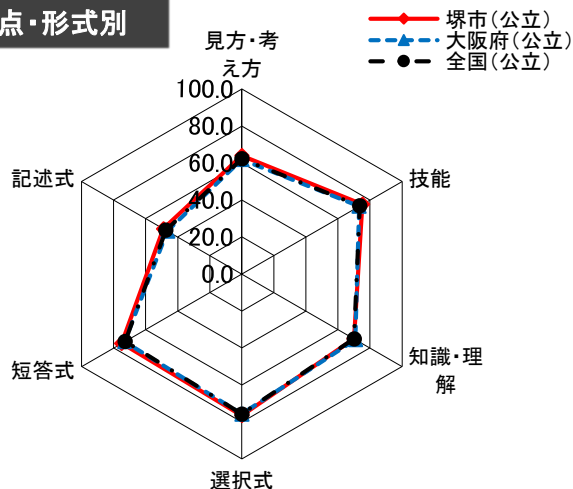
領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
	全体	14	68	66	66.6
学習指導要領 の領域	数と計算	7	65.2	63.4	63.2
	量と測定	3	54.3	52.0	52.9
	図形	2	76.9	76.0	76.7
	数量関係	7	69.6	68.3	68.3
評価の観点	算数への関心・意欲・態度	0			
	数学的な考え方	8	64.0	61.9	62.2
	数量や図形についての技能	4	75.3	73.2	73.6
	数量や図形についての知識・理解	2	70.0	70.9	70.1
問題形式	選択式	5	76.5	75.7	75.7
	短答式	5	75.0	73.1	72.8
	記述式	4	48.9	46.4	47.4

領域別



観点・形式別



今後の取組

- 「図形」領域については、全国と同程度であるが、来年度より「量と測定」領域から面積や体積が「図形」領域に移行されることから、さらに図形を構成する要素に着目し、計量の仕方について考察する活動や、図形の性質を日常生活に生かす活動等の充実を図る。
- 記述式の問題においては、「ある事柄が成り立つことの根拠や理由等について説明すること」や「他者の考えを解釈すること」といった力を身に付けられるような学習活動の充実を図る。

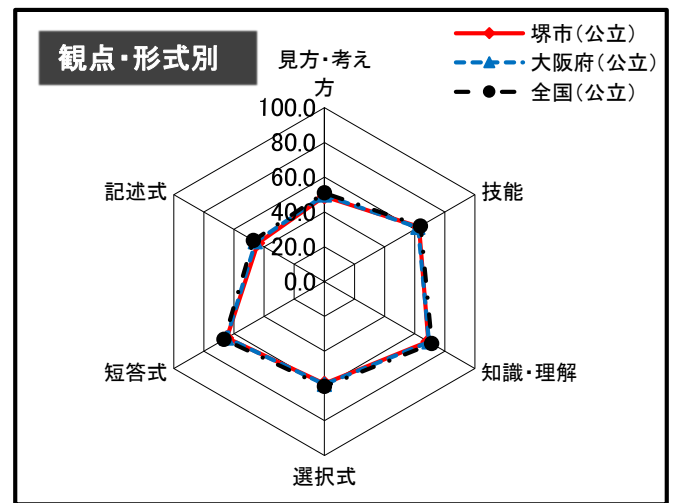
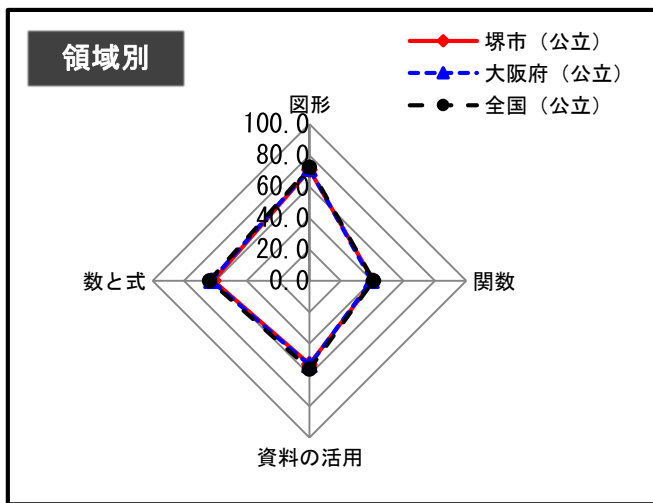
中学校数学

○平均正答率は58%であり、全国平均との差も縮まっている。「図形」の領域については、平均正答率が70%を超えており、改善が見られる。

- 「関数」の領域においては、全国と同程度であるが平均正答率は低く、他の領域は全国平均を下回っている。
- 「資料の活用」や「記述式」の正答率が低く、全国を3P程度下回っていることから、資料から読み取り考察する力や「問題解決の方法」や「判断した根拠」を数学的に説明する力を育成する必要がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国・大阪府と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
全体		16	58	58	59.8
学習指導要領 の領域	数と式	5	61.3	62.6	63.8
	図形	4	70.7	71.3	72.4
	関数	3	40.7	39.6	40.8
	資料の活用	4	53.2	53.8	56.3
評価の観点	数学への関心・意欲・態度	0			
	数学的な見方や考え方	8	48.9	49.7	51.0
	数学的な技能	3	62.9	62.2	63.9
	数量や図形などについての知識・理解	5	69.0	69.5	71.3
問題形式	選択式	5	58.7	59.1	60.3
	短答式	7	64.9	64.9	66.6
	記述式	4	44.2	45.7	47.1



今後の取組

- 学ぶことに興味・関心をもち、見通しをもって粘り強く問題解決に取り組む学習の充実を図る。
- 記述式の問題については、論理的に推測する力や表現する力を高めるために、言語活動を重視した数学的活動を充実させ、自分の考えを、数学的な表現を用いて説明したり、考えることの楽しさを感じながら課題に取り組んだりする学習の充実を図る。
- 「資料の活用」については、ヒストグラムや代表値などの必要性和意味を理解し、資料の分布の傾向を読み取り、批判的に考察し判断する学習の充実を図る。

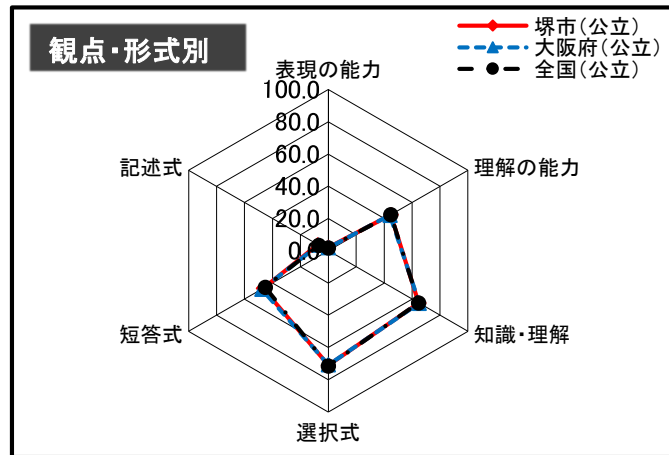
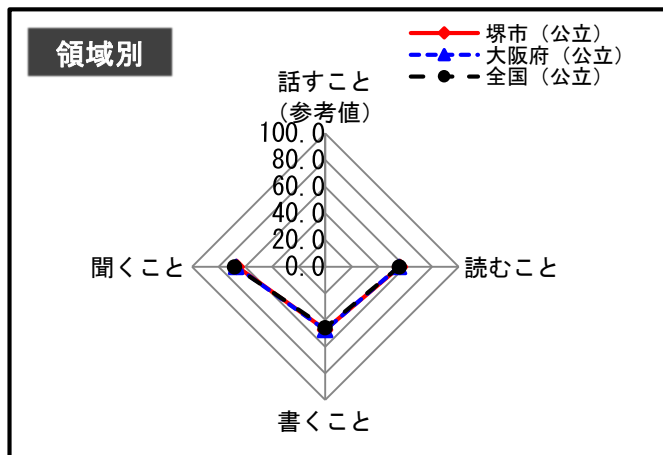
中学校英語

- 平均正答率は56%であり、全国と同程度である。
- 「読むこと」「書くこと」の領域や「言語や文化についての知識・理解」の観点で、全国平均を上回っており、知識・理解の習得とともに、読み書きに係る基本的な技能の定着が見られる。
- 「聞くこと」は、全国平均を下回った。また、「外国語の表現の能力」の観点、「記述式」の形式で平均正答率が7.6P~2.1Pと低いことから、まとまりのある英語の文章を聞いて理解すること、まとまりのある文章を書くことに課題がある。

領域・観点・問題形式別の結果（全国と堺市）

分類	区分	問題数 (問)	平均正答率(%)		
			堺市(公立)	大阪府(公立)	全国(公立)
	全体	21	56	56	56.0
学習指導要領 の領域	聞くこと	7	66.3	66.8	67.9
	話すこと(参考値)				
	読むこと	6	56.0	55.3	55.6
	書くこと	8	47.3	47.4	45.8
評価の観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	0			
	外国語表現の能力	1	2.1	1.9	1.8
	外国語理解の能力	6	44.8	44.2	44.7
	言語や文化についての知識・理解	14	64.8	65.1	64.7
問題形式	選択式	13	71.0	70.7	71.4
	短答式	5	46.6	47.7	45.2
	記述式	3	7.6	7.0	6.8

※「話すこと」の領域については、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」を別に集計され、都道府県や政令市の結果は公表されていません。



今後の取組

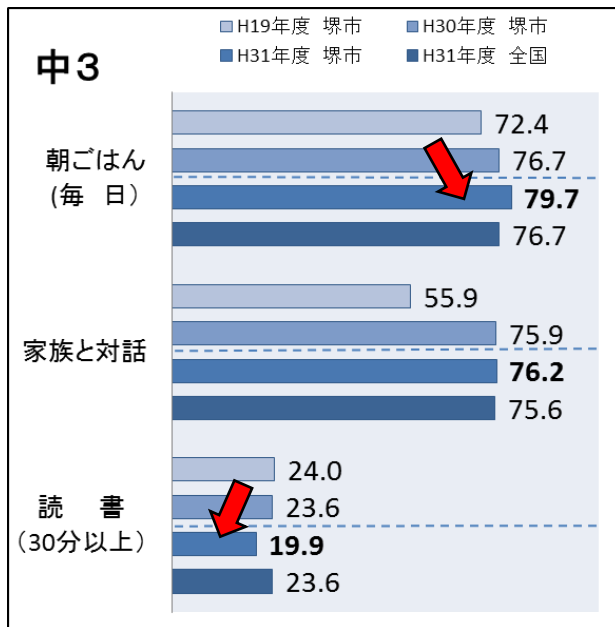
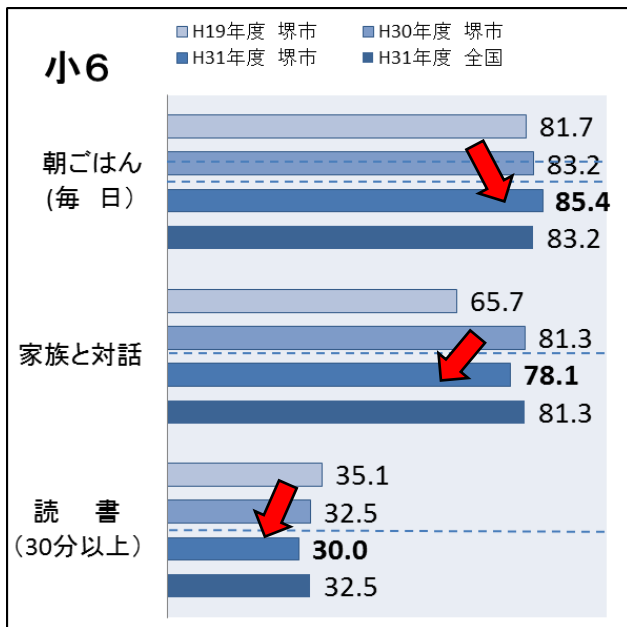
- 外国語の学習では、個別の知識の習得ではなく、実際のコミュニケーションの場において活用できる技能を育成する。そのような技能の育成には、考えや気持ちを伝えなどの英語で伝え合う活動を繰り返し行うことに合わせ、授業では基本英語を使用し、授業を実際のコミュニケーションの場にする必要がある。
- 「聞くこと」では、一文一文を聞き取るだけでなく、目的・場面・状況を理解し、要点や概要をとらえることができるよう、聞く目的を明確にし、聞くようにする。普段の授業を自然な英語使用場面にするには「聞くこと」指導において重要である。

学習・生活状況に関する調査の結果概要

◆ 家での7つのやくそく

～「30分以上の読書」が過去最低で課題～

- 小中学校ともに、平成19年度及び平成30年度と比べて、「朝ごはん」の項目において、改善がみられる。中学校の「家族との対話」は平成19年度及び平成30年度と比べて増加しており、全国平均を上回っている。
- 小学校において、平成30年度と比べて、家族と対話している児童の割合は、減少しており課題である。
- 小中学校において、平日30分以上読書している児童生徒の割合は調査開始後過去最低かつ、全国平均を下回っており課題である。



※「早寝早起き」「前日準備」「宿題」「携帯電話やスマートフォン等の時間」は、質問紙調査を実施していないため記載していません。

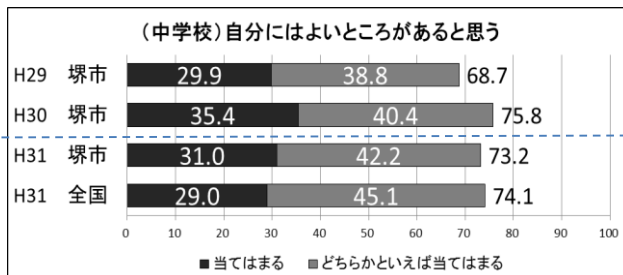
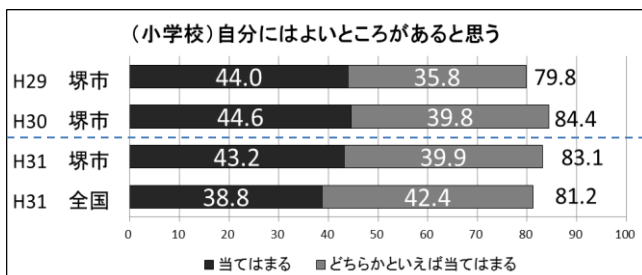


学年に応じて子どもたちが、家での過ごし方を自分で計画し、チェック、改善する機会を設け、自律的に生活する力を育みましょう。

◆ 自尊感情を育む教育

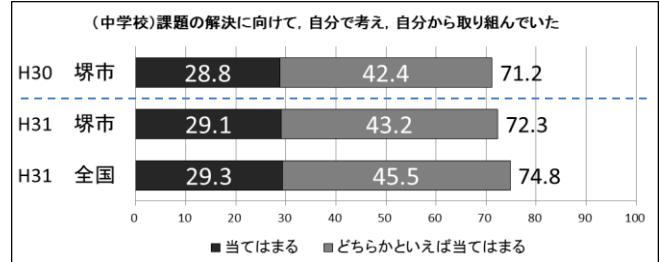
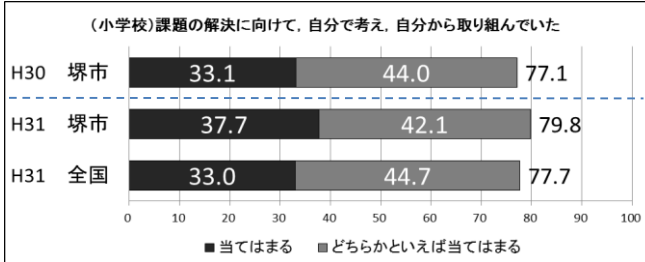
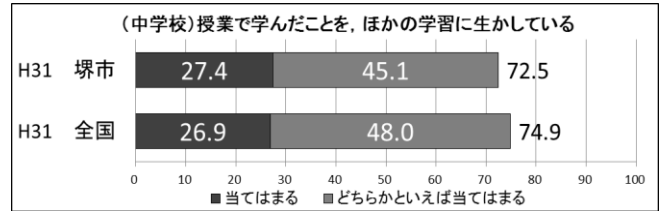
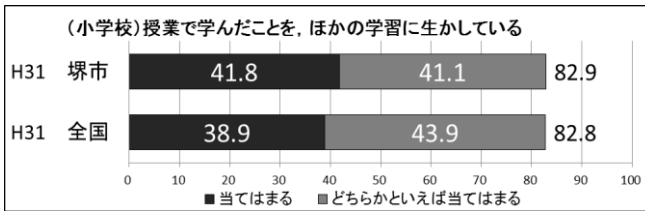
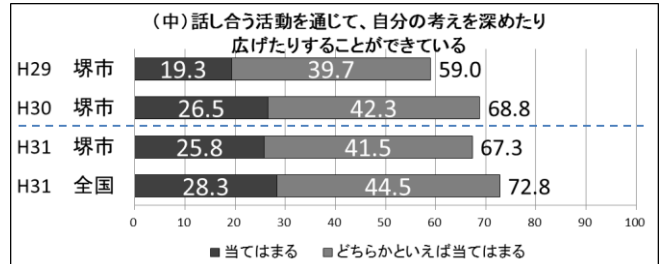
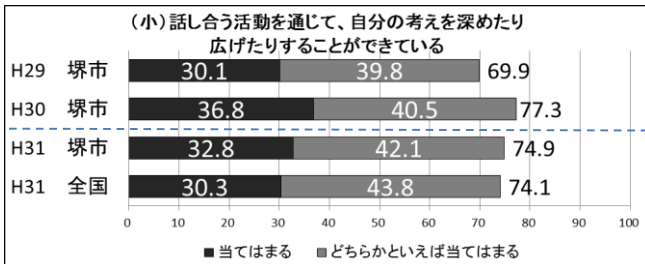
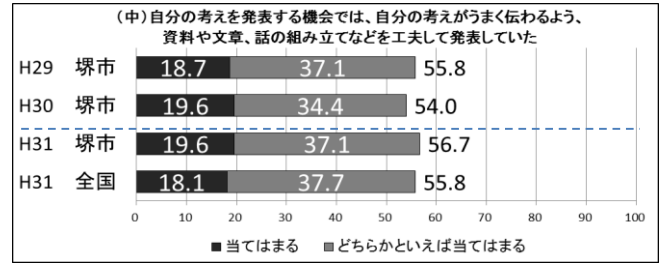
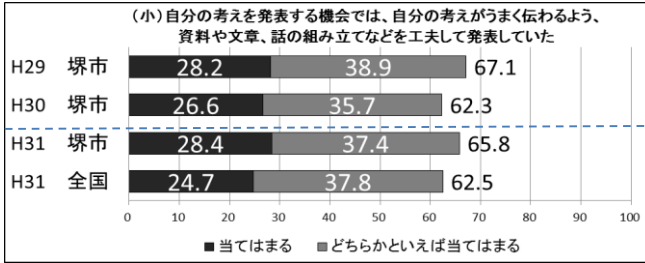
～子ども自身が自分の良さを感じられる取組の推進～

- 自尊感情について「自分にはよいところがあると思う」という質問項目では、小学校は肯定回答の割合が平成30年度をやや下回ったものの、全国平均を上回っている。
- 中学校においては、平成30年度を下回り、全国平均も下回った。
- 引き続き、各校のこれまでの取組をさらに推進し、教育活動全体を通して、子ども一人ひとりのよさを認めながら伸ばし、子ども自身が自分のよいところを感じられるような取組の推進を図る。



授業改善に関する項目 ~子どもが考える授業改善をより一層の推進~

- 小学校は、以下の4つの質問項目において、全てで全国平均を上回った。特に言語活動や主体的な学びについてのポイントが高かった。生活に関連する事象や、学ぶ意義を感じる指導や、何についてのどのように話すのかなどの視点をもとにした授業改善が進んでいると考えられる。
- 中学校では、言語活動に関する項目において全国平均を上回った。
- 中学校では、主体性に関する質問項目や、自分の考えを広げたり深めたりすることに関する項目において全国平均を下回った。
- めあてを立てる際は、教師がめあてを示すのではなく、子どもから出た疑問や課題をもとにして子どもとともにめあてを立てるなど、子どもの主体性を育む授業改善が必要である。



宿題 + α の主体的な家庭学習 ~改善進むも30分以下の児童生徒が依然として課題~

- 30分以下と回答した児童の割合は、昨年度と同程度で改善傾向が見られる。しかしながら、小中学校ともに30分以下の児童生徒の割合が全国の倍程度となっており課題である。
- 低学年のうちから、子どもが自ら学びたいことを選択し、やりたい気持ちに結びつくような視点で家庭学習を検討したり、中学校区で家庭学習を通して発達段階に応じてどのような力を身に付けるのかを共有して取り組んだりするなど、自律的な学びを9年間を通して支えることが肝要である。

